

今月のテーマ

万人幸福の葉



え・城谷俊也

大決断の拠り所

経

営者は日々多くの決断を迫られます。その積み重ねが事業の成果につながっていきます。

経営上の決断は、数値や事実の蒐集にはじまり、それらの整理、解釈、さらに自他の経験知を加味して行なわれるものでしょう。

ただし、いくらデータを蒐集し、優秀な頭脳集団を抱え、経験豊かな識者を総動員して判断材料を揃えても、最終的な断を下すのはトップをおいて他ありません。その際に問われることは、右にするか左にするかの根本的な価値基準、判断基準を当の経営者が持っているかどうかということです。

倫理法人会では、その拠り所、決断の指針として、純粋倫理に基づいた物の見方、考え方を提供しています。この生活法則をまとめた書物こそ『万人幸福の葉』（以下「葉」）に他なりません。

ある社長は、「葉」の六条にある「予は親の心を実演する名優である」という箇所を読んでハッとしました。子を社員、親を社長と置き換えて見たからです。社員ばかりを責めていた態度を改め、自身の生活や言動を改善したところ、はからずも社員との関係が円滑になったのです。

この事例で重要なのは「ハッとした」という点にあります。情報として純粋倫理の内容を受け取っても、自らを行動へと突き動かすような閃きが去来するか否かは、その人の感性によらざるを得ません。実は、純粋倫理の学びで最も重視するのは、この感覚なのです。

ただし、こうした直観も、まずは知的な情報として獲得されなければ、閃きようがありません。講話などで知識として蓄積された純粋倫理の情報、実践を通して生きた知恵と化し、より精度の高い気づきをもたらすことでしょうか。ここに至ってはじめて、生活法則としての純粋倫理は、経営上の決断の拠り所になるのです。

「葉」の著者である丸山敏雄は、この本の発刊式の挨拶で、十七の標語は口をついて出るように記憶して欲しい」と語り、ここから深い道に入ることができるといった

ことを述べたといえます。読者が先入観を捨て、現状に照らし合わせて、自らの実践と結びつけた読み方をする時、そこに込められた叡智の扉は開きます。求めの強さ、心の純度に応じて、その扉の開閉度合いは変わるので。

「葉」という語は、一説によると「枝折しお」から転じた言葉だといえます。迷いや辛い山道などで、木の枝を折ったり、細く削ったりして、後続の人や帰路の道標としたことから、案内や手引きを意味します。

この小冊子を経営上の指針とするには、まず親しむことです。いつも持ち歩き、折に触れて細くこゝとを習慣化してみましよう。

または、毎日気に入った箇所を音読することもできます。不思議とその時の自分自身に必要なびつたりのフレーズに気づく「出合いあ」瞬間があります。それをそのまま実行に移してみるのです。

「葉」を自律的に活用する時、物言わぬ文字が語りかけ、大決断の拠り所となってくれるでしょう。